

アメリカ文化における祭り

清水克祐

(1)

アメリカ文化の特質を示すひとつのパラメーターとして、祭りを少しく考察したい。祭りという日本語を用いたが、神仏をまつことから、大東京まつり、港まつり、学園祭、文化祭までも含められるように、ここで考えるアメリカ文化における祭りも広義のものである。Fair, festival, festivity, fete, holiday, celebrationなどの語がほぼ広義の「祭り」に相当しよう。

英語の fairの語原はラテン語の *feriae* で holiday (祭日) の意。これがイギリスでは、特定の場所で、聖人祭日などに開かれる市、縁日として長らく愛好されてきたが、これが大西洋を渡って新大陸へ行くと、旧大陸における意味を失って、農産物・畜産物の共進会や産業博覧会となり、見せ物や飲食店も立ち並ぶにぎやかなものとなった、と『エンサイクロペディア・ブリタニカ』第11版¹⁾ (1910-1911年刊行) は指摘している。ここにすでにアメリカ的な特徴の一端が見られるが、その具体的な現れは、county fair (郡のフェア), state fair (ステートフェア) であり、さらには、早くも1853年に New York World's Fair (ニューヨーク世界博覧会) が開かれた。

アメリカにおける祭りは、このような大規模のものから、市町村の小さなものまで、さまざまな種類がある。これを遺伝的なものと、環境的なものとの、ふたつの要素から見ることにする²⁾。

(2)

アメリカにおける祭りの遺伝的要素とは、この新大陸に移住してきた民族—主として白人—がその出身地より持ち越してきたものをさす。

今やシカゴを抜いて米国第2の大都会となりつつあるロサンゼルスには、日系、中国系、韓国系の居住者が少なくなく、日系人はLittle Tokyo、中国系人は Chinatown という民族系の居住地区を構成していることはよく知られることだが、その Little Tokyo でのお祭りには、みこしがかつぎ出される。

チャイナタウンで毎年1月に行なわれる Chinese New Year Celebration は有名で、Golden dragon parade (金竜の舞) があつたりして、この祭りは州の観光名所のひとつとなっている。サンフランシスコのチャイナタウンでも同じ祭りが行なわれる。

オハイオ州出身のドリス・クレベンジャーさんによると³⁾、同州北西部の都市 Toledo トレドでは毎年8月に The International Festival (国際フェスティバル) が開かれ、夕方になると各民族系の人々が故国の衣装を着て、それぞれ旧世界の音楽に合わせて舞踊を楽しむ。会場に出される食物が、これまた、インターナショナルで、ドイツ系の人には hot potato salad, red cabbage それに rabbit stew を、ハンガリー系の人には有名な goulash (グーラッシュ—牛肉と野菜のシチュー)、ポーランド系は kielbasa (キルバーサー—んにく風味のソーセージ)、メキシコ系は tacos (タコス) と tortilla (トルティーヤ—パンケーキの一種) を観客に供するというのだから、郷土色豊かで壮観である。

このような「遺伝」型の祭りは各地にたくさんあつて、枚挙にいとまがないが、これが新興国アメリカの祭りの特徴的要素のひとつとなっていることは、容易に察知されよう。

またアメリカで Easter (復活祭) は全国的に、Ash Wednesday (聖灰水曜日) や Good Friday (聖金曜日) はカトリック教徒により、祭

られるが、これらは旧大陸のキリスト教国の祭りと共通であり、遺伝型である。

(3)

環境型の祭りとは、アメリカの風土の中で自然に生まれた祭りのことである。先住民のインディアンの祭りはすべてこのタイプであるが、建国200年の短い歴史の中でも、各地でいろいろな祭りが生まれている。

たとえば、アラスカの Anchorage (アンカレッジ—鉄道建設のための資材を運ぶ輸送船が停泊したことからこの地名がある) では毎年2月中旬10日間にわたって Anchorage Fur Rendezvous (アンカレッジ・ファーランドブー) という祭りが開かれる。ファーランドブーとは毛皮取り師とバイヤーが落ち合って毛皮の交易をすることで、1930年ごろ始まった。時節はきびしい冬の真最中で、タフなアラスカ人も近隣のエスキモー人も春の到来を待ちこがれているところである。陰うつなる冬を払いのけようとこの毛皮交易の集まりをお祭り騒ぎに持って行こうとする心情は想像にかたくない。毛皮だけでなく、民芸品、手芸品も展示即売する、ビール飲みコンテストをする、腕ずもう大会を開く、犬ぞりレース大会を開くなど、ある旅行案内記⁴⁾の表現を借りると、“spontaneous happenings” (自発的に起こった出来事) がこの祭りの中に組み込まれて行った。この祭りは地元では“Rondy”の愛称で親しまれ、また the Mardi Gras of the North北のマルデイグラ (謝肉祭) の別称もあるのは、いかに陽気な祭りであるかを物語る。

もうひとつ、アラスカならではの春の祭りがある。アンカレッジの北、フェアバンクスの手前約60マイル (96キロ) に Nenana (ネナナ) という河港の町がある。その近くを流れる the Tanana River (タナナ川) が春になって、何月何日何時何分に氷が溶けるかの公認のかけが行われ

る。名づけて the Big Breakup ceremony (氷溶けの儀式)、正確な時刻を当てた者には賞金10万ドルが与えられる。川が氷結する前に三脚台を置く。これに線で時計をつないでおき、氷が溶けて三脚が揺れ動くとその時刻を記録できる仕組になっている。これも長い氷の世界に閉ざされた人々が思いつくお遊びである。

カリフォルニア州 Angels Campでは毎年5月に Jumping Frog Jubilee (カエル跳び大会)が開かれるが、同州のゴールドラッシュ時代に鉱山で行なわれていた遊びであった。これを作家マーク・トウエインが取り上げて物語にまとめ、1865年に発表して、有名なものとなった。またトウエインもこれによって作家として地位を確立したのだった。

(4)

アメリカにおける祭りに、もうひとつ「遺伝型+環境型」の混合型がある。そのもっともよい例が Thanksgiving Day (感謝祭)である。

1620年12月21日、John Carverを団長とする102名の清教徒たちはプリマスに上陸し、植民地を開いた。その冬はことのほか寒さがきびしく、団長のカーバーを始め、47名が一冬の間に生命を奪われた。しかし近隣のインディアンは白人たちに友好的で、トウモロコシの栽培をすすめた。1621年の夏、トウモロコシの大収穫があり、生き長らえる希望が生れた。第2代団長 William Bradfordは3日間の祭日を行なうことを布告し、わが恵み深き父なる神に感謝の念を捧げたのであった。Harvest festival (収穫の感謝祭)は中世紀以降旧大陸の教会で行なわれた祭りであり、これが新大陸に持ち越され、新大陸の風土の中で行なわれるようになった祭りの第1号であることに、たいへんな意義がある。

感謝祭はその後ニューイングランド地方やその他の州で行なわれるようになったが、日は一定していなく、また南部ではこの祭りを無視した州もあった。全国的な法定祝祭日として11月の第4木曜日と制定された

のはリンカーン大統領のとき（1863年）である。感謝祭の制定化に貢献した陰の女性に Mrs. Sara Josepha Haleがいる。この人は婦人雑誌 *Godey's Lady's Book* 『ゴッディズ・レイディブック』の編集長で、誌上に論陣を張っては感謝祭を法定休日とすべし、と4代にわたる大統領にアピールした。この人はなかなかの crusader（ある主義、主張の実現のために猛運動をする人）であったわけだが、童謡“Mary Had a Little Lamb”（1830）の作詩者でもあった。ここら辺はアメリカ史の「おまけ」—エピソード—である。

「遺伝型+環境型」の混合型祭りのもうひとつの例として camp meeting（野外集会）をあげても差支えあるまい。1799—1801年に長老派の牧師 James McGreadyがケンタッキー州のローガン郡で行なったのが始めとされているが、それは開拓地には常設の教会がないから野外集会を開いて信仰を深めようというものであった。ある日ある所で3、4日にわたりこの種の集会があるとの通知が出される。すると開拓民は一家で30マイル、40マイルの遠くから出かけて行って、集会地にテントを張って寝泊りする。丸太のベンチと粗末な説教壇が作られる。夜になると集会が開かれ、説教につぐ祈りの言葉を捧げ、讃美歌を歌ったりする。また生れたばかりの子に洗礼が行なわれたり、結婚式も挙行される。一回の集会に1万人も、また2万人も集ったという記録があるとのことである⁵⁾。長老派はこの活動を1805年にやめたが、メソジスト派、バプテスト派、シエーカー派などはこの野外集会を開いては宣教活動を積極的に行なって、多数の信者を獲得した。また開拓民にとっても宗教生活・社交生活を送る上で便利な、または狂信的な雰囲気にもひたれる集会でもあった。

「慰安施設など何一つ持っていなかった開拓地の人びとにとって、キャンプ・ミーティングは、平素抑圧しつづけてきたものを一気に発散させるまたとない機会でもあったのだ⁶⁾」これは西川正身氏の鋭い指摘であ

るが、ここに祭りが発生するプロトタイプ（原型）があると考えられよう。

「だが、家庭において両親に反逆したビアスは、こうした周囲の狂信的な雰囲気に対しても反撥した」米国文学の鬼才アンブローズ・ビアスの性格を知るひとつのかぎとなるものであろう。

現在、世界各地を回って福音を説く宣教師に Billy Graham (1918—) がいるが、巡回説教者的であり、信仰復興運動者でもあり、彼の活動は現代版キャンプミーティングと言っても過言ではない⁷⁾。キャンプミーティングそのものはとっくにすたれたが、アメリカ生れのこの「祭り」の精神は現代でも生きている、と言えよう。

References

- 1) *The Encyclopaedia Britannica* Eleventh Edition 29 vols.
(The University of Cambridge, 1910) s.v. Fair
- 2) George R. Stewart, *American Ways of Life* (成美堂, 昭和39年)
- 3) Doris J. Clevenger, "The International Festival"
(文教大学女子短大「英語英文科ニュース」No. 6 昭和58年12月)
- 4) *Sunset Travel Guide to Alaska* (Lane Publishing Co., 1978)
- 5) *Encyclopedia Britannica Micropedia II* (1980)
- 6) 西川正身『孤絶の諷刺家 アンブローズ・ビアス』(新潮社, 昭和49年)
- 7) Reader's Digest, *Family Encyclopedia of American History* (The Reader's Digest Association, 1975)